

歎異抄はじめました

—親鸞聖人から届いたメッセージ—

## はじめに

ふたたび大平光代さんと本願寺出版社の書籍でご一緒することとなりました。大平さんの闊達かつたな語りとみずみずしい感性は、本書でも十分に発揮されています。そのあたりをぜひお楽しみください。

第一章や第三章では、大平さんと私がフリーに対話しています。第一章では『歎異抄』、第三章では親鸞聖人・恵信尼公のお手紙を手がかりとしました。いずれも情感あふれる言葉が綴られたテキストです。二人が思いつくままにお話するよりも、何か手がかりがあった方が、深いところへ歩みを進めることができるのではないかと考えました。

また、第二章は座談会となっています。大平さんから「若い人たちの話を聞いてみたい。親鸞聖人とか、浄土真宗とか、『歎異抄』とか、どういう感じに響くのかを知りたい」と提案されたので、私の寺子屋・練心庵のスタッフに集まってもらいました。

みんなの発言はほぼそのまま掲載されています。

### 『歎異抄』について

『歎異抄』は、「同じ道を歩んでいる者（＝親鸞聖人の教えの流れに位置する人々）」へのメッセージです。にもかかわらず、『歎異抄』は真宗門徒以外の人が読んでも、宗教心を揺さぶる力をもっています。ここが『歎異抄』のすごいところです。異端を歎くという姿勢から始まった著述なのですが、この書が切り開いた世界は人間の宗教性を問うものとなっているのです。

『歎異抄』は、今から七百三十年ほど前に書かれました。著者は、親鸞聖人を直接知る唯円という人物の手によるものだと考えられます。原稿用紙にすればわずか三十枚程度の分量しかないと言われるような書物です。ですから、この一冊で親鸞思想や浄土真宗の教えのすべてが理解できるわけではありません。ましてや、ここから仏教を体系的に学ぶこともできません。それでも、たいへんな求心力を持つ書物として、

時代を超えて現代に読み継がれているのです。なにしろ『歎異抄』は、「それまで漠然ともっていた宗教や仏教のイメージが転換する」といった特性をもっています。また、「絶体絶命の時に浮上する言葉」が並んでいます。だからこそ、今なお多くの人々が『歎異抄』を繰り返し求めるのでしょう。そして大平光代さんもそのひとりです。

ただ、本書では『歎異抄』全般を取り上げて論じるのではなく、いくつかの条に着目して、そこから対話を展開しています。

### 「親鸞聖人御消息」と「恵信尼消息」について

親鸞聖人のお手紙は四十三通（真筆は十一通、他は書写されたもの）現存しています。そのうち年月日がわかっているお手紙が十五通あります。年月日がわかっているものの中で、一番年代が早いお手紙は親鸞聖人が七十一歳、最後に書かれたお手紙は八十八歳です。大半のものは八十歳代に書かれています。たとえば、「目もみえず候ふ。

なにごとみみなわすれて候ふ」（八十六歳時）などといった生々しい老いの様子が書き記された文面もあります。

これらものは『御消息集』『血脈文集』（けちみやくもんじゅう）『末灯鈔』（まつとうしやう）などに収録されました。内容は、同朋・門弟へのお礼状や、質問へのお返事、聖人の身边に関することであり、『教行信証』や『歎異抄』とはまた違ったおもむきがあります。

また、「恵信尼消息」と呼ばれている文書は、恵信尼公のお手紙八通（これに譲り状を二通合わせる場合もある）を指します。八通のお手紙はいずれも、親鸞聖人がご往生なさってから、恵信尼公が末娘の覚信尼（かくしんに）さまへ宛てて書かれたものです。

「恵信尼消息」は、大正十年に本願寺の蔵（宝物庫）で発見されたそうです。このお手紙の内容によって「親鸞聖人は比叡山で堂僧をされていた」「法然聖人は勢至菩薩の化身」「親鸞聖人は観音菩薩の化身」など、貴重な情報やエピソードが明らかになりました。親鸞聖人や恵信尼公の夢のお話も記されており、とてもリアルです。夢のお話からは法然聖人・親鸞聖人・恵信尼公の関係性を知らることができます。

私は、親鸞聖人・恵信尼公のお手紙を通じて、おそらく大平さんの語りの切れ味が増すことだろうと予想していました。予想通りの反応になったと思います。

本書は本願寺出版社の皆さんのおかげで発刊へと至りました。この場をおかりして御礼申し上げます。また、ライターの大栗典子さん、今回もお世話になりました。練心庵スタッフのみなさんもお疲れ様でした。

なにより、おつき合いいただいた大平光代さん、またお連れ合いの川下清さん、お嬢さんのハルちゃん、ありがとうございます。何度もご自宅で歓待してくださいましたこと、感謝申し上げます。

积 徹宗

歎異抄はじめました

—親鸞聖人から届いたメッセージ—

目次

## 第一章 釈徹宗と大平光代の『歎異抄』

- 『歎異抄』に助けられ生きてきた 12
- 「立ち位置」を変えると「フクになる」 22
- 第二条―ただただシンプルな姿勢 34
- 第七条―身も心もまかせきる「強さ」 44
- 第三条―悪人こそ救われる 53
- 第九条―帰る場所があるからこそ 61
- 唯円さんって、すごいセンス！ 67
- 第十三条―思い通りにならないからこそ  
後序―そらごと たわごと 83 74
- ネットではなく現実を生きる力を 88

## 第二章 若い世代の悩みと歎異抄

- 歎異抄の魅力は 94
- 家の宗教、自分の宗教 99
- 「幻聴さん」がやってくる 106
- ネット社会を生きる 114
- 若者の貧困について 120
- 親子ならではの葛藤 127
- 夫婦ってなに？ 132
- バリアをはずそう 139
- 「自分ものさし」から「仏ものさし」へ 145

## 第三章 世俗を生きた人間親鸞 ―ご消息にみる晩年のお姿―

「玉日」は実在人物か	160
苦悩を経て精力的に著作	162
蓮位による代筆の書状	165
法友の客死に涙	172
家族をもつことによる苦悩	177
往生間違いなし——恵信尼さまの手紙	182
六角堂の夢告	186
恵信尼さまの夢	191
孫の生活に思い悩む	197
先人が歩んだこの道を行く	201

※本文中の引用につきましては、『浄土真宗聖典(註釈版)』『歎異抄(現代語版)』  
『親鸞聖人御消息 恵信尼消息(現代語版)』(本願寺出版社)を用いております。

## 第一章 釈徹宗と大平光代の『歎異抄』

## 『歎異抄』に助けられ生きてきた

大平 釈さん、こんにちば。遠いところようこそお越し下さいました。

釈 大平さんの家に来させていたただくのは二度目ですが、今日は自宅ではなく、隣家のアトリエでお話を伺えると聞いて楽しみにやってきました。以前、お会いした時に、少し『歎異抄』のお話をされていたので、その時からじっくり『歎異抄』についてお話をしたいと思っていました。今日はよろしく願いたいします。

大平 こちらこそよろしく願います。早速ですが、自分の人生を振り返ると、『歎異抄』にずいぶん助けられたように思います。

釈 大変な世界を生きてこられましたからね。

大平 『歎異抄』をじっくりと読み始めたのは、司法試験に合格した後の司法修習生の時でした。司法修習終了と同時に、私は弁護士になって自分の法律事務所を開設するつもりでしたので、この期間中にいろいろ準備をしていたのです。

弁護士という職業は、人のわざわいの中に身を置きます。つまり人が幸せに暮らしているとき弁護士は必要ではありません。何か困った問題が起きて、自分では解決できないようなときに弁護士に相談するという具合です。

ですから、何らかの問題や悩みを抱えている方を相手にしなければなりませんので、法律書以外に心理学とか哲学とかの本をたくさん読んでいたのです。その中に『歎異抄』もありました。当時、『歎異抄』の独特の言い回しがおもしろくて何度も読み返していましたし、離れ小島に一冊持って行くとしたら『歎異抄』と答えるぐらい好きな本でした。ただ、内容を本当に理解しているとは言えなかったと思います。

今の私たちは、六道輪廻りんねや解脱げだつと言われてもなかなかピンとこないし、自分の行為の結果で来世は苦をうけるなんてあまり思いませんよね。生まれ変わったらまた一緒になるうね、なんていう人でも（私も主人に言うてます）、虫に生まれ変わって一緒になるなんてことを想像したりしてないと思います。おばあちゃん子で小さいときから仏事に接している私でも、『歎異抄』は宗教書というよりも教養書を読んでいるよ

うな感じでした。

ところが、私の中で、『歎異抄』が教養書から宗教書に変わる出来事があったのです。釈 ほう。

大平 大阪市助役在任中、公務員の厚遇問題が発覚しました。市民が苦勞して納めた税金を湯水のように自分たちのために使っていたのです。私は改革の責任者として、大阪市役所という組織に長年溜まった膿を出し、改革にあたっていたのですが、ひどい誹謗中傷をうけました。私たちの時代のつけを子どもたちに負わせてはいけないという思いで必死に頑張ってきたのに、本意がまったく伝わりませんでした。

改革の道筋をつけた後、当時の市長が出直し選挙に出るために辞職されたときに、私も辞職したのですが、しばらくマスコミから逃れるために知人の山荘で身をかくしていました。寒い時期だったので暖炉にくべる薪を拾いながら散歩をしていますと、ちようど山の中腹あたりに琵琶湖が見えるところがあって、夕陽をうけて湖面がきらきら輝いているのが見えたのです。その光に吸い寄せられるように山を下りていきま

した。そして高架橋になっている駅のプラットホームに上がり、しばらくその輝きをみていたのです。

すると北風がピューッと吹いてくると同時に、「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」という『歎異抄』の一節が頭の中でこだましたんです。その時、はっとしたんです。

釈 『歎異抄』の後序にでてくる一文ですね。

大平 はい、そうです。私はこれまで世のため人のためと思っていたけれど、本当はどうやったんやろう。自分がいいように思われたかっただけじゃないのか。人のためではない。全部自分のためにやっていたことなんだ。そんなふう思ったときに、煩惱具足の凡夫というのは自分のことだという自覚がはじめてできたんです。その時を境に『歎異抄』が私の中で哲学書から宗教書に変わったように思います。

釈 それで生き方も変えられたのですね。